

「C型肝炎」

大阪大学講師・第1内科 林 紀夫
信州大学教授・第2内科 清澤 研道 編集

国立長崎中央病院臨床研究部

矢 野 右 人

今回、医学書院から、林紀夫先生、清澤研道先生の編集による新刊書「C型肝炎」が発刊された。C型肝炎遺伝子についての最初の発表は1989年であり、その後HCV抗体測定系を用い、臨床応用が可能になって、5年程度しか経過していない。しかし、その間のC型肝炎ウイルスに関する基礎的研究あるいは臨床的研究はすばらしいスピードで進み、ウイルス側面からの研究の進展ならびに治療という最終的目標が、IFNを用いることにより、同時進行してきた。新しい知見が、文字どおり日進月歩で積み重ねられてきた結果、今日に至り、効率良い研究のもと、早くも一般臨床で応用される研究成果は一応の目的を達成したと考えてよい。

この時点で刊行された本書は、最新の知見がほとんどの領域でコンセ

ンサスとして、まとまったものと考えてよい。

第1章では、C型肝炎ウイルス遺伝子の基礎的事項を中心に、専門的事項まで幅広く解説しており、ややもするととりつき難い分子生物学をわかりやすく説明してある。第2章では、各種ウィルスマーカーの測定法、更にウィルスの変異と感染様式など、臨床医にとって理解しなければならぬ必須項目の解説である。

第3章では、C型肝炎の病態として発生機序として考えられる免疫学的側面、更に最近変化しつつある肝組織像の解説と分類、第4章では、患者のマネジメントを中心としてC型肝炎の臨床像、そして、第5章でIFNを中心とする抗ウィルス療法が含まれている。

本書を通読すると、C型肝炎の臨床病態とマネジメント、そして治

療法に重点が置かれ、臨床医が患者と対面した場合、十分に対応できるように解説した内容を包含している。そして、更に理解度を深めるために、基礎的事項に関し、広く言及してあるのが特徴である。これまでも、C型肝炎に対する成書、発表論文は多数のものが認められるが、日々の研究の進展によりその変化も著しかった。C型肝炎をグローバルにみて、一応の見解に達したと考えられる現在、本書はC型肝炎の診療はもとより基礎的知見を含め、これ一冊でほとんどを網羅し、座右の書として利用価値が高いものと思われる。

● B5 頁 306 図 127 写真 18
カラー写真 18 表 67 1996 定価
11,330 円(税込) ㊦400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)